

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。



上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。



上の句

- 1 秋の田のかりほの庵の 苔をあらみ
- 2 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の
- 3 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の
- 4 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の
- 5 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の
- 6 かささぎの 渡せる橋に おく霜の
- 7 天の原ふりさけ見れば 春日なる
- 8 我が庵は 都の辰日しかぞ住む
- 9 花の色は 移りにけりないたづらに
- 10 これやこの 行くも帰るも 別れては

下の句

- 1 世をうち山と 人はいふなり
- 2 三笠の山に 出でてし月かも
- 3 長々し夜を 独りかも寝む
- 4 知るも知らぬも 逢坂の関
- 5 わが衣手は 露にぬれつつ
- 6 衣ほすてふ 天の香具山
- 7 声聞く時ぞ 秋は悲しき
- 8 富士の高嶺に 雪は降りつつ
- 9 我が身世に なるながめせし間に
- 10 白きを見れば 夜ぞ更けにける

上の句

- 11 わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと
- 12 天つ風雲の 通ひ路 吹き閉ぢよ
- 13 筑波嶺の 峰より 落つる 男女川
- 14 陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに
- 15 君がため 春の野に 出でて 若菜摘む
- 16 立ちわかれ いなばの 山の 峰に 生ふる
- 17 ちはやぶる 神代も 聞かず 龍田川
- 18 住の江の 岸に 寄る波 よるさへや
- 19 難波濁 短き 芦の 節の間も
- 20 わびぬれば 今は 同し 難波なる

下の句

- 1 乱れそめにし 我ならぬに
- 2 恋ぞつもりて 淵となりぬる
- 3 唐紅に 水くくるとは
- 4 人には 告げよ 海人の 釣り舟
- 5 まつとし 聞かば 今 帰り来む
- 6 をとめの 姿し ばしとどめむ
- 7 みをつくしても 逢はむとぞ思ふ
- 8 夢の 通ひ路 人目よくらむ
- 9 逢はで この世を 過ぐしてよとや
- 10 我が衣手に 雪は 降りつつ

「百人一首 初めてかるた」 制作：ポリゴンドリル

上の句

- 21 今来むといひ しばかりに 長月の
- 22 吹くからに 秋の 草木の しをるれば
- 23 月見れば ちちに 物こそ 悲しけれ
- 24 このたびは 幣もとりあへず 手向山
- 25 名にし 負はば 逢坂山の さねかつら
- 26 小倉山 峰のみ ち葉 心あらば
- 27 みかの原 わきて 流るる いづみ川
- 28 山里は 冬ぞ 寂しさ まさりける
- 29 心あてに 折らばや 折らむ 初霜の
- 30 有り明けの つれなく 見えし 別れより

下の句

- 1 人に 知られて くるよしも かな
- 2 むべ山風を 嵐といふらむ
- 3 有り明けの 月を 待ち出で てるかな
- 4 今一度の 行幸待た なむ
- 5 置きまどは せる 白菊の花
- 6 いつ見きとて か 恋し かるらむ
- 7 明け かり 憂きものは なし
- 8 人目も 草も かれぬと思へば
- 9 紅葉の 錦 神のまに まに
- 10 我が身 一つの 秋には あらねど

上の句

- 31 朝ぼらけ 有り明けの 月と 見るまでに
- 32 山川に 風のか けたる 欄は
- 33 久方の 光の だけき 春の日に
- 34 誰をかも 知る人 にせむ 高砂の
- 35 人は いざ 心も 知らず ふるさとは
- 36 夏の 夜は まだ 宵ながら 明けぬるを
- 37 白露に 風の 吹き しく 秋の野は
- 38 忘らるる 身を ば思はず 誓ひてし
- 39 浅茅生の 小野の 篠原 忍れど
- 40 恐れど 色に 出でに けり 我が 恋は

下の句

- 1 松も 昔の 友なら ぬに
- 2 しづ心 なく 花の 散るらむ
- 3 物や 思ふと 人の 問ふまで
- 4 吉野の 里に 降れる 白雪
- 5 人の 命の 惜しくも あるかな
- 6 あまり などで かの 人の 恋しき
- 7 貫き 止めぬ 玉ぞ 散りける
- 8 花ぞ 昔の 香に には ほひける
- 9 雲の いづこに 月 宿るらむ
- 10 流れも あへぬ 紅葉 なりけり

「百人一首 初めてかるた」 制作：ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。



上の句

- 41 恋すてふ我が名はまだき立ちにけり
- 42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ
- 43 逢ひ見ての後の心に比ぶれば
- 44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか
- 45 あはれともいふべき人は思ほえて
- 46 由良の門を渡る舟人かちを絶え
- 47 八重葎茂れる宿のさびしきに
- 48 風をいたみ岩打つ波のおれのみ
- 49 みかき守衛士のたく火の夜は燃え
- 50 君がため惜しからざりし命さへ

下の句

- 昔は物を思はざりけり
- 身のいたづらになりぬべきかな
- 人こそ見えね秋は来にけり
- ゆくへも知らぬ恋の道かな
- 長くもがなと思ひけるかな
- 人知れずこそ思ひ初めしか
- くだけて物を思ふ頃かな
- 屋は消えつつ物をこそ思へ
- 木の松山波越さじとは
- 人をも身をも恨みざらまし

上の句

- 51 かくとだにえやはいぶきのさしも草
- 52 明けぬれば暮るるものとは知りながら
- 53 嘆きつつ独り寝る夜の明くる間は
- 54 忘れじの行く末までは難ければ
- 55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど
- 56 あらざらむこの世の外の思ひ出に
- 57 めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に
- 58 有馬山猪名の笹原風吹けば
- 59 やすらはで寝なましものをさ夜更けて
- 60 大江山いく野の道の遠ければ

下の句

- 傾くまでの月を見しかな
- 今日を限りの命ともがな
- まだふみも見ず天の橋立
- 名こそ流れてなほ聞こえけれ
- 雲隠れにし夜半の月かな
- 今一度の逢ふこともがな
- いかに久しきものとかは知る
- さしも知らじな燃ゆる思ひを
- いでそよ人を忘れやはする
- なほ恨めしき朝ばらけかな

「百人一首 初めてかるた」 制作：ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。



上の句

- 61 いにしへの奈良の都の八重桜
- 62 夜をこめて鳥の空音ははかるとも
- 63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを
- 64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
- 65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを
- 66 もろともにあはれと思へ山桜
- 67 春の夜の夢ばかりなる手枕に
- 68 心にもあらで憂き世にながらへば
- 69 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は
- 70 さびしさに宿を立ち出でて眺むれば

下の句

- よに逢坂の間は許さじ
- 龍田の川の錦なりけり
- 今日九重に匂ひぬるかな
- 人づてならでいふよしもがな
- あらはれ渡る瀬々の網代木
- いづこも同じ秋の夕暮れ
- 恋しかるべき夜半の月かな
- 花より外に知る人もなし
- 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
- かひなく立たむ名こそ惜しけれ

上の句

- 71 夕ざれば門田の稲葉おとづれて
- 72 音に聞く高師の浜のあだ波は
- 73 高砂の尾の上の桜咲きにけり
- 74 うかりける人を初瀬の山おろしよ
- 75 契りおきしさせもが露を命にて
- 76 わたの原漕ぎ出でて見れば欠方の
- 77 瀬を早み岩にせかるる滝川の
- 78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に
- 79 秋風にたなびく雲の絶え間より
- 80 長からむ心も知らず黒髪の

下の句

- あはれ今年の秋もいぬめり
- 外山の霞たたずもあらなむ
- 乱れてけさは物をこそ思へ
- かけじや袖の濡れもこそすれ
- 幾夜寝覚め須磨の関守
- もれ出づる月の影のさやけさ
- 雲居にまがふ沖つ白波
- 芦のまろやかに秋風ぞ吹く
- はげしかれとは祈らぬものを
- われても末にあはむぞ思ふ

「百人一首 初めてかるた」 制作：ポリゴンドリル

上の句と下の句をつないで、歌を完成させよう。

5/5



上の句

- 81 ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば
- 82 思ひわび されても命は あるものを
- 83 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る
- 84 ながらへば またこの頃や 忍ばれむ
- 85 夜もすがら 物思ふ頃は 明けやらで
- 86 嘆けとて 月やは物を 思はする
- 87 村雨の露も まだ干ぬ 榎の葉に
- 88 難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ
- 89 玉の緒よ 絶えなば 絶えね ながらへば
- 90 見せばやな 雄島の 海人の 袖だにも

下の句

- 山の奥にも 鹿ぞ 鳴くなる
- 濡れにぞ 濡れし 色は 変はず
- 霧立ちのぼる 秋の 夕暮れ
- みをつくしてや 恋ひわたる べき
- 憂しと見し世ぞ 今は 恋しき
- ただ有り 明けの 月ぞ 残れる
- 閨のひまさへ つれなかりけり
- かこち 顔なる わが 涙かな
- 憂きにたへぬは 涙なりけり
- 忍ぶることの 弱りも ぞする

上の句

- 91 きりぎりす 鳴くや 霜夜の さむしろに
- 92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の
- 93 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ
- 94 み吉野の 山の秋風 さ夜更けて
- 95 おほけなく うき世の 民に 覆ふかな
- 96 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
- 97 来ぬ人を 松帆の 浦の 夕風に
- 98 風そよぐ ならの小川の 夕暮れは
- 99 人も惜し 人も恨めし あぢきなく
- 100 ももしきや 古き軒端の しのぶにも

下の句

- ふるさと 寒く 衣打つなり
- 海人の小舟の 綱手かなしも
- 我が立つ 袖に 墨染の 袖
- ふりゆくものは 我が身なりけり
- みそぎぞ 夏の しるしなりける
- 衣かたしき ひとりかも 寝む
- 世を思ふ故にもの 思ふ身は
- 焼くや 藻塩の 身も ころも ごと
- なほあまりある 昔なりけり
- 人こそ 知らね 乾く 間もなし

「百人一首 初めてかるた」 制作：ポリゴンドリル



できた？

じゃ、チャマメと対戦しよう

アプリで待ってるよ